

幻魔大戦 13

魔王の誕生

平井和正



角川文庫

げん ま たいせん
幻魔大戦 13

ひら い かず ま さ
平井和正



角川文庫 5006

昭和五十六年十月十日 初版発行
昭和五十七年六月十日 三版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七二二―(大代表)
千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-138327-0946 (0)

幻魔大戦 13

魔王の誕生

平井和正



角川文庫 5006

イラスト 加藤直之

後になって振り返ってみると、いざ急変事が突発した時は、予感などという脆弱なものは吹き飛んでしまっている。

異常心理の虜になっっているから、予感のことなど忘れてしまう。ある程度、事がおさまって余裕が生じないことには思い出しもしない。

杉村由紀が予感について考えるようになったのは、事が落着いてしばらく経ってからだった。あの日、朝から自分が異様な苛立ちにとり憑かれ、他人に当り散らしたことなど、完全に忘れ去っていた。井沢郁江にそれを指摘されるまでは思いだすこともなかったのだ。

地平に黒雲が湧き立つ無気味な圧迫感といわれのない焦燥感で、とろ火に焙られる苦しみを味わったことが、変事突発と同時にあっさり消滅してしまった。憶えてさえいなかったのである。そういえば朝からいやな予感に苦しめられていたのだ、と後になってから今更のような感慨を持った。どうにもならぬ、身の置き所のない煩悶であり、忘れる方がおかしいのだった。

もつとも、変事が起きた時、大きなショックであったはずなのに、実際にはさほど動転した記憶がない。その時の人々の身の処し方、振舞いなどを克明に憶えている。自分も冷静であったとはいえないはずだが、なぜか他人のことはよく憶えているのだ。

お嬢さん育ちの平山圭子ひらやまけいこの意外なしたたかさは感嘆に価いした。おっとりしていても控え目だから、おとなしすぎて頼りにならないかといえ、決してそんなことはなかった。

杉村由紀の方がむしろ冷静さを欠き、機転を欠いていたといえるようである。平山圭子は四人の黒背広の「紳士」たちを少しも怖れおそなかった。自分が東丈あずまじょうの秘書だという自覚がこのほっそりした少女を強固な筋金入りにしたのであろう。

記憶とは奇妙な働きを持ち、その時の光景が映画さながらに眼前に浮んでくる。実際は由紀が秘書として丈と有名作家の面談に同席していたにもかかわらず、平山圭子の視点で、事務所に侵入してきた男たちの姿がまざまざと思い出せるのだ。

見るからに粗悪な、気分が悪くなるほど恫喝どうかく的な波動を黒背広から発散している男たちであった。部屋の中に押し戻もどされた夏本幸代なつもとゆきよが顔色を白っぽくさせ、体を硬くして平山圭子の傍へ戻ってきた。諍いさかいのことなど吹っ飛んでしまったようだ。

男たちがあらゆる社会的観点に照らして、まともといえない種類の人間に属することは一目瞭然りょうぜんであった。皮膚感覚でわかるのだ。鳥肌とりはだが立ち、体が冷たくなってくる。

秘書見習の三人は棒立ちになって、黒背広たちと対峙たいじした。相手は四人の屈強な男たちである。威圧されるのは仕方がなかった。

「こちらの会長さんにお目にかかりたいんですがね」

と、先頭に立った黒背広がいった。意外なほど穏やかな物腰であり、それだけに薄気味が悪か

った。

「失礼でございますが、どちらさまでしょうか？」

と、平山圭子が立ち向った。夏本幸代は圭子の背後に隠れるように廻りこんでしまっている。

「あたしは山本と申しますがね……」

がっちりした体格の黒背広が低姿勢でいった。もみあげの長いお定まりのヤクザ面は精悍そのものであった。ギラギラと油が浮いているような恐ろしくアクの強い面構えである。しかし、高級ヤクザであり、下っ端ではないらしい。連れの三人はいずれも若く、凄みを効かせるのに精一杯という印象であった。

山本と名乗った黒背広には余裕があった。戦車みたいに厚みのある体格の中に、精力を抑制しているのが感じられる。剥き出しの凶器のような連れの若者たちとは貫禄が違うということであろう。

田崎宏とかみあわせてみるとぴったりだ、と由紀はいささか不謹慎な感想を抱いたのを憶えている。がっちりした幅広、肉厚の体格やしたたかで精力的な面相に類似点があるのである。タイプが似ているのだが、もちろん田崎は風格の点で格段の差をつけている。重厚な風韻とでもいべきものだ。

「この会長さんは、確か東丈さんとおっしゃいましたね。実は重大な用件で是非とも大至急お目にかかりたいんでございますがね」

黒背広の紳士、山本はいんぎんな語調を崩さなかった。他の三人の舎弟分は陰惨な白目を使っている。浅墓^{あさはか}だが、危険な存在であることを誇示しているのであろう。暴発すると前後の見境いなくなるという粗暴タイプであることは明白であった。相手が女子供でも凄みをきかさずにいられない状態にあるのだ。

「申しわけございませんが、先生はとてご多忙です。お約束のない方にお会いすることはいたしません……」

平山圭子は後退しない気構えを見せて、柔く、しかしきっぱりといった。

「ほう……」

ほっそりした長身の美少女の見せた外柔内剛の根性が、黒背広の山本には意外だったようである。一堪^{ひとたま}りもなく縮み上がるはずの小娘がへんにしっかりしていたからであらう。

「しかし、たいへん重大な用があつて来たんですがね」

「では、ご用件を承ります。お聞かせ願えれば、後ほど先生にお伝えいたしますから……」

平山圭子は振り返らずに、夏本幸代に声をかけた。

「メモ用紙を取って下さい……」

「は、はい」

夏本幸代は慌てていわれた通りにした。もはや諍いどころではなかった。自分たちがまぎれもなく、暴力団組員たちと対峙していることがわかったのだ。

「どうぞご用件をおっしゃって下さい」

圭子は筆記の準備をして、山本を促した。

「いや、先生に直接あたしから申し上げますよ。大事な用なのでね。そうさっきからいつていでしょ」

「ですから、先生はお約束のない方とはお目にかかれませんか。先生に逢う約束をされている方は沢山おられますし、予約以外の方の割り込みを認めますと、お約束の方が迷惑されますので。秘書のあたしのご用件を承りますので、伝言なさって下さい」

「あんたは会長さんの秘書ですか？ ずいぶん若くて美人の秘書さんだ……羨ましいですな」
山本という黒背広はもの慣れた口調でいった。

「しかしね、本当に重大な用件でして、是非とも会長さん直接に話さないと具合が悪いんですよ。約束しないで来たのは申しわけなかったが、会っていただけないと会長さんにも大変なことになるんですがね」

「とにかく、今すぐにとおっしゃられても無理です。先生は今、ご来客中ですから。ご用件をお話しになれないのでしたら、改めて予約して下さい」

平山圭子は懸命にいった。言葉は拙いが、一步も退かない気構えは明らかであった。

「しかしね、お嬢さんは秘書なんだろう？ 会長先生のご意向も聞かずに、そんなこと一存で決めてもいいんですかね？ あたしは何も脅しやハッタリをかけているわけじゃないんだ。本当

にお宅の会長先生にとって大変なことになるからいつているんだよ」

黒背広の言葉遣いはようやく崩れ始めた。多少苛立ってもきたのだろう。

「でも、こうしたことにはちゃんと決まりがありますので。予約外のお客様は決まっておりますし、でもとおっしゃいます。本当に大変なことだとおっしゃるなら、どうぞあたくしにお聞かせ下さい……あたくしは東先生の秘書です。先生の秘密を守るのが秘書の務めなんですから」

「おい！」

と、黒背広の若者の一人が恫喝的な恐ろしい声を出した。平山圭子のねばり強さにしびれを切らしたのだろう。もともと浅墓な若造であり、堪え性こらえしやうなど持っていないのだ。

「これだけ丁寧についているのに、まだわからねえのか」

いきなり手近にあった観葉植物の鉢はちを蹴け飛ばした。さっと凄惨せいさんな雰囲気ふんいきが迸はとばしる。

「秘書なんかじゃわからねえ！ 会長をここへ出せ！」

「乱暴するなら警察を呼びます」

圭子は蒼白あおしろい顔になったが、崩れなかった。

「夏本さん、すぐ百十番して下さい」

「……………」

夏本幸代はすくんでしまっていた。唇くちびるを震わせているだけだ。目が恐怖に輝いている。

「おう、電話でもなんでもしてみやがれ」

と、黒背広の若者が凄んだ。夏本だけでなく伴野静子ばんのしずこも金縛りのようになっていた。

「では、警察を呼びますから、警官立合いで用件を話して下さい」

圭子はデスクに戻って、電話の送受器を取り上げた。わずかに指が慄ふるえるが、それだけだった。態度は平靜そのものだ。

「この女郎、なめやがって！」

黒背広の若者たちが殺気立って前へ進み出た。血相が変わっている。恫喝の域を超え、暴発しなければおさまらぬという剣幕であった。

「まあ、待つんだ」

と、山本が若者の胸を突き戻した。

「このお嬢さんはしっかりしてる。優しくておとなしそうだが筋金入りだ。お前らには歯が立たんよ……」

顔が笑っていた。わざとらしく度量の広い所を見せつける気だろうか？ 平山圭子は電話のダイヤルに指をかけたまま、山本を見詰めた。

「静かに話そうよ、お嬢さん。この若い連中にはガタガタさせないからさ……しかし、お嬢さんは秘書の鑑かがみだね。まだ若いのに立派だ……」

彼は若者たちを振り返った。うんざりしたような貌かおだった。

「お前らは口を出すな。話がすむまでおとなしく待ってろ。わかったな」

「へえ……」

と、若者たちは異口同音にいった。ボス犬にひとほ一吠えされた若犬の卑屈さであった。苛々いらいらと体を揺りながら目をぎらつかせている。

「では、用件を承ります」

平山圭子は送受器を架台に戻した。相手の態度の穏やかさが信じられなかった。若者たちが今にも大暴れし、彼女自身乱暴されることを覚悟していたからだ。

「まあいいだろう。話そうか……」

黒背広の山本は腕組みをしていった。戦車を身近にしているような大質量の迫力があつた。不意にぎらっと目を光らせて圭子を見る。風圧を感じて圭子は思わず体を後に引きかけ、辛うじて堪えた。

「お宅の会にとっては大変な問題で、表沙汰おもてきたになれば、警察沙汰にも新聞沙汰にもなることなんだがね。実はうちの若い者が四人ほどお宅の会員に片輪にされちゃったんだ。一人はひどく脳をやられて一生廃人になっちゃった……やった奴やつの名前も顔も割れている。そこで、警察沙汰にするのも一つの方法だが、それではお宅の会に傷がつくだろう。その前に会長さんと話しあいに来たんだよ。礼儀正しく穏やかに話しあいがつけば、それに越したことはないからね。わかるだろう、お嬢ちゃん？ 決して乱暴をしに来たわけじゃないんだ。この若い連中は簡単に逆上する奴らだが、こうやってわたしが抑えているから大丈夫だ……しかし、早く先生にお目にかかって

話しあわないと大変なことになる。なにぶん仲間が廃人や片輪者にされて、若い奴等は荒れている。お先走りの馬鹿者が何をするかわからない。そうすれば、全部表沙汰になってしまうからな……

「どうだろう。話は呑みこめたかね、お嬢ちゃん？ わかったらすぐに会長さんに話を通じてくれないか？」

口はおとなしいが、時折目がぎらっと底光りするのが無気味であつた。平山圭子は蒼白な引き緊まつた表情で話を聞いていた。緊張した貌は美しかった。

「わかりました。お話は確かに承りました。でも、申しわけございませんが、会長はただ今来客があつて面談中です。ひとまずここはお引取り願えませんでしょうか？ 手が空きしだいご連絡申し上げますので、お名刺を頂戴できますか？」

「どうもうまく話が通じねえようだな」

と、山本は苦笑いしていった。

「意志疎通ができないもんかね？ こうやって出張ってきたのに、玄関払いを食わされてはいそうですかと引上げるわけにやいかんよ。どんな大事な用か知らんが、会にとつてどっちがさし迫った重大問題かわからないでも、会長秘書は務まるのかい？」

「先生は逃げも隠れもいたしません。先生が逃げてしまふとお思いならとんでもない間違いです。先生はそのような方ではございません」

平山圭子はきつぱりといった。

「ただ、今は来客中なので、しばらく待って下さるようお願いしているだけです。ここはひとまずお引取りいただけませんでしょうか……」

「そうはいかないんだよ、お嬢ちゃん。若い連中は跳ね返りが多いから、何をするかわからん。玄関払いを食ったなんて聞いたら、かっとなって手のつけようがなくなっちまう。では、先生の手が空くまで、ここで待たせてもらおう」

「それは困ります……」

「こっちも困るんだよ」

山本はにやりと笑った。

「じゃ、こういうのはどうだ？ 先生にうちの事務所へ話しあいに来てもらうというのは……」

逃げも隠れもしない先生なら、来てもらえるんじゃないのかな？」

「そう申し伝えます……」

「それじゃ困る。確かに来るといふ保証がほしい」

「保証と申しますと？」

「今、わたしたちは引上げるから、だれか一人いっしょに来てほしい。お嬢ちゃんでもいいんだよ。事務所に案内するから、そこから先生に連絡して来てもらってくれ。それがつまり、保証というわけだな。どうだい、お嬢ちゃんが忠義な秘書さんだったら、それくらいできるんじゃないかな」

いか？」

「……………」

息を詰めて夏本幸代と伴野静子は成行を見守っていた。

「わたしもこちらの会や会長さんに傷をつけまいと気を遣っているつもりなんだがね。まあしかし、お嬢ちゃんが厭だというんなら、先生が逢ってくれるまでここで待たせてもらうしかないが……………」

暴力団幹部の山本は、抑えてはいるが、明らかに圭子との遣り取りを楽しんでいた。

「どうする？」

「わかりました。あたくしが行きます」

圭子は蒼白い表情でいった。声はしっかりしていた。

「ほう?!」

山本が思わず感嘆の声を漏らし、二人の秘書見習は息を吞んでいた。

「どちらへ行けばいいんでしょうか？」

「事務所だ。そこから電話すればいい」

「ちよつと出かけてきますから、後はよろしくお願いします」

圭子はデスクの後ろのロッカーからコートとハンドバッグを取り出しながら、二人の女子大生に向っていった。

「杉村さんに今のこと、きちんと説明しておいて下さいますか」

黒背広の若者たちは神経の浮き出したような浅薄な顔に奇妙な表情を浮かべて、平山圭子を見ろじろ見ていた。

「え、ええ……」

夏本幸代は満足に口をきくことができなかった。顔色が粉っぽくなり、唇が慄えている。一同の注視を浴びながら、圭子はコートの袖に手を通した。大胆ともなんともいいようがなかった。覚悟が決まってしまったのである。蒼白い表情だが、静かに落着いていた。

「出かけられます……」

と、圭子はいった。山本は多少圧迫感を抱いたようである。逆にうながされて慌てたのかもしれない。

「行こうか……」

山本はおい、といって舎弟たちに顎をしゃくって見せた。

執務室のドアが開いて、井沢郁江が出てきたのはその時である。

「あっ、こいつだ！」

と、黒背広の一人が思わず口走った。額に生々しいバラ色の傷痕のある若者であった。総毛立ったような顔付になって、郁江を指差す。

「山本さん、こいつです、この女なんだ、あの晩、義をやりやがったのは！」

郁江はたじろがない目で、山本を初めとする暴力団組員たちを見返した。そのきれいに澄んだ眸ひとみには驚きの色はいささかもなかった。それが「郁姫」の所以ゆえんであった。普通の人間のように決して反応しないのである。

今も黒背広の不穏な四人組が眼中にないような平然とした顔だった。

「そうかい、このお嬢ちゃんかい？」

と、山本はつくづくと郁江を眺めながらいった。感情を覗かせない顔になっていた。手をあげて額を搔く。何かしら困惑したような動作であった。手首の皮膚に刺青がちらりとのぞいた。

郁江はどうかしたのかとは尋かなかった。

「事情を説明する必要があるかい？」

と、山本が尋ねた。

「俺たちが来た理由も先刻承知だろう？ 違うか？」

「圭ちゃんが行く必要はないわ」

と、郁江はいった。普通の声音であった。怯えてもいないし、虚勢を張っているのでもない。山本ら黒背広の男たちにも、それは通じたようであった。

「この人たちが、先生に逢わせろというので……」

と、圭子がいった。

「来客中だからといってお断りしたら、代りにあたしに来いって」